



TITLE:

ルカーチにおける社会存在の論理 (二)

AUTHOR(S):

平井, 俊彦

CITATION:

平井, 俊彦. ルカーチにおける社会存在の論理(二). 経済論叢 1957, 80(3): 147-164

ISSUE DATE:

1957-09

URL:

<https://doi.org/10.14989/132562>

RIGHT:

經濟論叢

第八十卷 第三號

ルカーチにおける社会存在の論理(二)平 井 俊 彦	1
經濟成長とインフレーション・ギャップ鎌 倉 昇	19
特別償却をめぐる企業利益 の表示問題(続き).....高 寺 貞 男	37
選択理論における一つの問題点.....西 川 徹	50
国会開設請願運動の発展構造(三).....内 藤 正 中	69

昭和三十三年九月

京都大學經濟學會

ルカーチにおける社会存在の論理(二)

平井俊彦

三、資本主義的商品生産社会の構造⁽¹⁾

われわれはいままでの叙述のなかで、ルカーチ思想の原形をヘーゲルの論理に求め、社会的生産における人間労働の構造をあきらかにしてきた。人間は生産実践においてのみ、自らを個体として自立化するのであるが、このことによってかれの作る社会はかれから独立し、対立する客体となる、とともに、孤立した人間はこの過程においてこの物を介して相互に結合するのである。そして、この人間の社会的労働こそが自然史から区別して社会存在を特色づけているもののなのである。ところが、自然は単に社会と区別せられ対立されるものではなくて、社会の基底をなすものである。というのは、すでにみたように、生産の主体たる人間はなによりもまず身体をもった感性的存在であり、これが外部の自然にたいしてはたらきかけるとき、はじめてみずから感性的存在であることを確認できる。われわれの現実の社会はこのような自然を土台としており、「歴史は人間の真の自然史である」。だが、このようにみると、この自然はもはや単なる自然ではなく自己に対立する感性的主体と対立する社会的自然であり、いわば外在化された自然である。すなわち、それは感性的人間がはたらきかけ、作りだす客体であるとともに、それら

を媒介する地盤となるのである。したがって、われわれが現実の社会存在を問うとき、自然のなかでこのような身体的存在としての人間がいとなむ労働をあきらかにしなければならず、このようにしてはじめてその労働の現実的疎外の構造もはつきりするといえる。すなわち、ヘーゲルで提起せられた社会的労働の外在化は、感性的労働を媒介とすることによって深められるであろう。そしてこの深化によって、現実の外在化を解明したのはマルクスであり、ヘーゲルからマルクスにいたる論理の展開は、実は社会ことにブルジョワ社会の基礎である外在化の論理の発展であるといえる。ここでわれわれは身体的実践に基づく社会存在の論理をマルクスにしたがって追求しよう。

われわれにとつてもっとも根底的なものといえば、すでにみたように、対象的に活動する感性的人間の存在である。このような人間の活動を媒介としてのみ、自然はみずからに対決する対象をもつ、つまり、人間に对象的な自然となるのである。「人間の最初の対象は、自然であり、感性である」⁽²⁾。しかも、人間そのものについていえば、かれ自身、感性的主体として自然的諸力をもつて、自然にたいして活動する存在であり、この活動においてはじめてかれは単に自然に埋没していた状態から脱却して対自態となる。他方、このように労働を媒介として、自然は主体と客体に分裂し、それぞれは形態変化をとげて他にたいして対象となり、相互作用がおこなわれるのである。「歴史そのものは、自然史の、人間への自然の生成の、現実的な部分である」⁽³⁾。というのは、このような自然の外在化、つまり自然の生成を意味するものであろう。このことは、感性的人間が自然にはたらかかけるとき、すでに人間と人間との関係が前提されることをみれば、よりあきらかになる。すでにヘーゲルについてみたように、労働において人間は物との関係をおして社会的性格をもつのである。「個人は社会的存在であり」、そして「人間と自然との関係は直接に人間と人間との関係である」⁽⁴⁾。そこでは自然は完全に変質している。すなわち、「人間にとって、直接的・

感性的な自然は、直接には人間的感性であり、人間にとって感性的に現存する他の人間としてある。なぜなら、かれ自身の感性は、他の人間をつうじてかれ自身にとってはじめて人間的な感性となるからである⁽⁵⁾。ヘーゲルが提起した社会的人間の構造は、このような感性的自然をつうじて具体化されねばならないとともに、「自然の人間の本質も社会的人間によってはじめて定在する」のである⁽⁶⁾。

われわれは社会がこのような社会的人間の活動によって生成する人間的自然であることを確認したうえで、さらにつつこんでこの現実の社会のなかであらわれる人間の生産実践の構造を、ことに労働による主体と客体との分裂性をあきらかにしよう。ここで問題となるのは、労働において主体と客体とがそれぞれの形態変化をとげながらあらわれる社会が、人間によって作りだされたものであるにかかわらず、人間から独立して客観的に自己自身の合法性をもつて動く存在となり、逆に個人をその法則体系のうちに組み入れ、そして人間を支配し限定する客観的な力となるということである。すでにヘーゲルの歴史哲学のなかでみたこの労働の外在化の論理、いいかえればブルジョワ社会における外在化の構造は、商品生産社会を貫ぬき、しかも商品生産社会において、もっともはっきりした形態であらわれてくる。ルカーチはマルクスにしたがって、商品生産社会の分裂構造を展開した。すなわち、商品生産の社会においてこそ、人間が作りだしたこの客観的世界が商品構造という対象性の形態 Gegenständlichkeitsformen をうけとり、人間に対立するのみならず、かえって自己自身の法則性のなかにまきこみ、人間自身を商品化する。そこにおいて、人間は社会ともっとも激しく対立し、悲劇的な闘争をおこなうのだが、さらにその、れぞれの側が、相互作用をおこないながら、新しい物象化 Verdinglichung をおびるのである。ここで重大なことは、ルカーチが資本主義社会において極度に分裂した主体と客体とのそれぞれの側面において、さらに相対立する

契機をみ、それぞれが相互に他に作用をおよぼし転化する過程、ことに、分裂性が主体内部にまで浸透する過程をあきらかにしていることである。われわれはここでルカーチの、『歴史と階級意識』を中心に、この諸側面内部の矛盾の運動を展開してみれば、つぎのようである。

資本主義社会では、人間の作った生産物は商品形態をうけとり、その商品世界の運動法則にすべてのものがまきこまれる。このばあい、すでにのべたように生産物は人間の作ったものでありながら、かれらから客観的に独立して対立しているのであるが、さらにこの物はいよいよ豊かにそれ自身の法則性をもって自ら発展してゆく。すなわち、この人間労働の対象化の産物は、いままでの欲望充足の手段（物としての自然的対象性）という質的規定性をもつにすぎなかったのだが、いまや人間労働の生産物（社会的対象性）という量的規定性をもうけとる。商品としてのこの対象の物的性格 Dinghaftigkeit はまったく新しい性格であって、物そのものが外見上、その本来の質的性⁽⁸⁾格を失って、一つの量的形態であらわれ、物そのものが疎外されている。商品生産社会では客体はすべてこのように質と量とに分解され、その量⁽⁹⁾が客体の本質であるかのような仮象をとる。この分裂性は商品支配する交換価値のなかにきわめてはっきりとあらわれる。「諸商品は、それらの自然的な存在様式とはまったくかわりなく、またそれらが使用価値として満足させる欲望の独自の性質ともかわりなく、一定の数量においてあいひとしく、交換においてたがいにおきかえられ、等価物として通用し、こうして、その多様な外観にもかかわらず、同一の単位を形成するのである」⁽⁹⁾。この商品形態にみられる「質にたいする量の支配」⁽¹⁰⁾は、資本主義社会の生活現象全体に浸透している、のみならず、この量化は私有財産の關係すなわち階級対立を極度にまでおしすすめるはたらきをする。マルクスは、このことを資本主義社会の私有財産について、つぎのように説明している。「人間の活動の対象が、

資本として、つまりそこでは、対象の自然的・社会的規定性はすべて解消され、私有財産はその自然的・社会的實在にあらわれようとも、いぜんとして同一であり、その現実的内容にまったく無関心であるようなものとして生産される」と、「その極点は必然的に全關係の頂上であり、その没落である」⁽¹¹⁾と。

このように客体が商品形態という対象化形態をとるのに照応して、主体も新しい物的形態をとり、それは客体と分裂しながら、それ自身の内部で分裂する。すなわち、主体そのものも商品化され、商品世界の法則の侵透を受けとるのである。「資本主義時代を性格づけるものは、労働者自身にとって、……かれに属するひとつの商品の形態をうけとる、ということである。この瞬間からはじめて、労働生産物の商品の形態が一般化されるのである」⁽¹²⁾。人間の商品化とは、「精神的にも肉体的にも非人間化された存在として」人間を生産することであって、人間の人格のいっさいが無視されて、すべて対象性の法則のもとに組みいられる、ことを意味する。ここでは、客体の分裂した状態にそくして、主体そのものが具體的・個別的労働と抽象労働に分割されている。「交換価値を生む労働は、使用価値の特殊な素材にたいして無関心であるのとおなじく、また労働そのものの特殊な形にたいしても無関心である。さらに、さまざまな使用価値は、いろいろな個人の活動の所産であり、したがって個人的なこととなった労働の結果である。だが、交換価値としては、それらのものは、同等な無区別な労働を、すなわち、そこでは労働するものの個性が消失している労働をあらわしている。だから交換価値を生む労働は、抽象的・一般的労働である」⁽¹³⁾。商品人間にあっては、事物とおなじく量的人間と質的人間に分割され、そのなかでむしろ個性が消失してただ量化された等質の人間のみが支配している。この没個性的な性格は商品形態の典型的形態である貨幣のうちに、特徴的にみられるであろう。「自然的富の形態はいずれも、この富が交換価値をつうじて転置されるまえに、個人の

対象にたいする実体的關係を前提としてゐるので、個人はその諸側面の一つをめざして物のうちにおのずから具体化され、そして物の占有は同時にかれの個性の發展としてあらわれる。……これに反して貨幣は一般的富の個体として、生産より生まれ、おのずからただ一般的なものだけをあらわすものとして、ただ社会の成果として、なんらその占有者への個人的關係をけつして前提とするものではない。貨幣の占有は、かれの個性のいずれかの実体的側面の發展としてでなく、むしろ没個性の占有である」⁽¹⁵⁾。

このように、資本主義社会では商品形態が社会生活の現象全体をつらぬき、自己の似姿にしたがつてそれらを変形するのである。逆にいえば、商品關係のカテゴリーが社会の個別的形態から普遍的形態になるとはじめて、資本主義社会は確立したといえよう。⁽¹⁶⁾ところで、このことは人間が作りだす社会からはじまって、全人間の存在構造にまで分裂性があらわれる、つまり、この分裂性は社会的カテゴリーとなり、直接的には社会の總体を支配するものとなるのである。マルクスが資本主義社会では、「所有者階級もプロレタリアートの階級も、おなじく人間の自己疎外をしめしている」といふのは、対立した二つの階級も「このようなものとして、一つの全体をかたちづくっている」ことを意味するものである。しかも、こころもつとも重大なことは、人間の作りだす客体も主体も分裂性をしめし、これが社会全体の普遍的カテゴリーとなるところでは、分業が社会現象全体を支配している、むしろ、分業の高度に發展する結果、社会は商品生産社会となりうる、という点である。われわれが先にみた個人と社会との分裂、さらにそれぞれの側面内部の分裂性はこの分業を媒介としてこそ、はっきりと確証することができるであらう。われわれはいまや、この分業によるこの分裂のカテゴリーがいよいよ諸側面に深化する過程をあきらかにするであらう。だが、このばあい問題となるのは、人間労働の対象化が分業という形ですすみ、客体がいよいよ豊かに

人間に対立してくればそれほど、その基底で人間は社会關係に必然的に組み入れられることである。ことに、分業が主体を分割し、特殊の個人となれば、個人はよりこの普遍的な社会關係に結合せざるをえないのである。マルクスはこの過程を『ドイチュ・イデオロギー』のなかで、きわめて適切にしめしている。すなわち、分業が発達すれば、個人と社会とは極度に分裂し、人間のつくります「生産諸力が個々人からまったく独立し、そして遊離したものととして、個々人と並存する一つの独自の世界としてあらわれる」。⁽¹⁸⁾とともに、個人はこの社会的分業に組みこまれざるをえない。というのは、「個々人の諸力はかれらの交通と連関のうちにおいてのみ現実的な力となる」からである。のみならず、分業によって個人の抽象化がすすめば、いよいよこのことはあきらかになる。「これらの個人から生産諸力はきりはなされ、したがってかれらはいっさいの現実的生活内容を奪いさられ、抽象的な個々人となっているが、しかしこのことによってはじめて、かれらは個々人として、たがいに結合する状態におかれているのである」。⁽¹⁹⁾すなわち、社会的分業において部分労働に分解された抽象的個人の分裂性が、社会的結合のきづとなり、労働による同一性の実現となるのである。このような普遍的運動こそが、ブルジョア社会を形成する原理なのである。

われわれはこれまでの叙述で資本主義社会では分業のために分解して個別化された個人が、まさにそのために結合せざるをえないことを確認したうえで、さらにこのおなじ分業が労働過程の合理化をとめない、ますます主体と客体とを分裂させ、抽象化させる過程をあきらかにしよう。⁽²⁰⁾ルカッチによれば、マルクスの人間主義は、「人間をその本質と全体性においえとらえる」ことになるのだが、その基準にてらして「資本主義的分業の破壊的・墮落的作用」をこそ解明しなければならない。そしてこの非人間化作用は、その分業のもっとも高度にあらわれる機械制

大工業の局面ではつきりよみとれるはずである。本来、人間の作りだした機械体系はそれ自身の法則性でもって動き、労働過程を合理化しつくしそれを抽象的・合理的な部分作業に分解する。「労働過程が合理的になると、経済過程の主体と客体とについて決定的な変化が生ずるのである。」⁽²¹⁾ まず、客体的には、労働過程の対象である生産物と労働作業そのものの質的な統一性が失われる。というのは、どの生産物も本来は全体としてつねに質的規定性をもつものであるが、合理的な作業行程において、それを構成する個々の要素に分解され、そのおののが、単に計算されるという量的規定性をもってあらわれる。そこではなんら生産物に有機的な統一性はみられず、一つの新しい対象性の形態が支配することになる。労働過程の生産物が変化すると、労働過程そのものも、「合理化された部分組織——その統一性は計算でのみきめられ、したがってそれらは相互に偶然的なものとしてみえられざるをえない——を、客観的に総括するものとなるのである。労働過程が合理的・計算的に分解すれば、相互に関係しあい、生産物のなかで統一的に結合している部分作業の有機的必然性はなくなってしまう。商品としての生産物の統一性は、もはや使用価値としての生産物の統一性とは一致しない」⁽²²⁾。

さらに、問題は主体的側面にかかわる。すでに、われわれは商品形態が主体にあらわれると、「量的人間」と「質的人間」に分解し、それらが全人格に対立してあらわれることをみてきたのであるが、「労働者の人間的な個性と特性は、この抽象的な部分法則の合理的に予測される機能のまゝでは、いよいよ誤ちを犯す源 *Fehlerquelle* といふだけのものとなる」⁽²³⁾。のみならず、機械体系は人間のつくりだしたものでありながら、もはや人間はこれを制御できず、逆にかれも機械化された部分となり、その機械体系のなかへ編みこまれる。機械体系は完全に人間の手から独立して、客観的に自己の合法則性にしたがって運動するところの「それ自体として一つの大きな自動装置」⁽²⁴⁾とな

る。このように巨大となった客観的な体系のなから、個人のなしうることは、せいぜいその合法則性を認識することにとすぎず、したがって、かれは「静観的な態度」kontemplative Haltung をとらざるをえない。すなわち、かれはもはや客観的世界そのものに立ちいつて、これを直接的に変革することができない。のみならず、すでにみたように、機械体系の客観的世界に組み入れられた主体の部分労働は機械化され、労働力が全人格にたいして客体化されている。というのは、この体系に在る現実的人間は分解されて、全人格とは異なる外的なものとして対立し、労働は極度に抽象化されて、ただ量的に測定できる空間化された時間に凝固することになるであらう。だが、われわれはこの機械体系による非人間化の問題が、個人そのものの内部の分裂性や活動性の喪失という形でのみとらえることから、もう一歩すすんで個人相互の關係が變化をうけることをあきらかにしなければならぬ。すなわち、有機的な生産において個々の労働者を一つの共同体に結びつけていた紐帯が、ここでは完全に破れてアトムとなっているのだが、このアトムとなった諸個人を媒介しているものが、すてに対象性の形態をとる。ルカーチの表現をかりればこうである。「これらのアトムは自己の労働行為では、もはや全体と直接的・有機的に結びつくことなく、それらが編みこまれている機構の抽象的な法則性⁽²⁵⁾だけで媒介されて、たがいに關係しあっているのである」と。

(1) この小論は、経済論叢第八〇巻一号(昭和三年七月号)の後半部分である。前半部分は、一、「問題の提起——社会存在の総体性」および二、「社会存在の根拠としての人間の生産実践の構造」をふくんでいる。

(2) K. Marx, *Ökonomisch-philosophische Manuskripte, Privateigentum und Kommunismus*, S. 195. von Erich Thier. 選集補巻四、三五四頁。

(3) K. Marx, *ibid.* S. 194. 邦訳、三五四頁。手稿のこの編にはきわめて、フオイエルバッハの自然主義に近いものが感ぜられるが、マルクス思想の形成上での『手稿』の意味や、限界をとりあげることは、ここでの問題ではない。

(4) K. Marx, *ibid.* S. 179. 邦訳、三三九頁。このように、自然を土台とすることによって、現実的疎外、さらには現実的止揚の構造があらわになる。

(5) K. Marx, *ibid.* S. 195. 邦訳、三五四頁。

(6) K. Marx, *ibid.* S. 184. 邦訳、三四三頁。自然が人間の基盤であるとともに、この自然が感性的人間と対立し、相互作用して、社会にたかまざる過程は、つぎの言葉できわめてよくしめされている。「社会そのものが人間としての人間を生産するように、社会は人間によって生産されている。行為と精神とは、その内容からしても成立のしかたからしても、社会的である。……自然の人間の本質は社会的人間によってはじめて定在する。なぜなら、ここではじめて自然は人間にとって、人間との紐帯として定在するのであり、他人にたいする彼自身の定在として、おなじようにまた人間的現実性の生活基盤として定在する。ここではじめて自然は人間自身の人間的定在の基礎として定在するのである。ここではじめて人間にとってその自然的定在はその人間的定在であり、自然が人間にとって人間になっているのである」。

(7) G. Lukács, *Der junge Hegel*, S. 614. (山口編『経済学と弁証法』二二三頁)。

(8) マルクスは私有財産にかかわらせてではあるが、客体または事物の対象化について、つぎのようにいう。「私有財産は、人間の個性ばかりでなく、事物のそれをも疎外する。地代はなんら土地の知ったことではないし、利潤はなんら機械の知ったことではない。地主にとって、土地はただ地代の意義をもつのみである。かれはその土地の各部分を賃貸して、地代を取得する。このことは、土地がその固有の属性、たとえばその沃度の一部を失うことなくして、失いうる属性であり、その量のみならず存在までもが、個々の地主のあすかり知ることなくして、つくられたり廃棄されたりする社会関係に依存するところの属性である」。Die deutsche Ideologie, III Sankt Max. Bücherei des Marxismus-Leninismus, S. 234. 邦訳、白楊社版二九七頁。

(9) K. Marx, *Zur Kritik der politischen Ökonomie*, S. 13. 選集補巻三、九頁。

(10) 『マルクス・エンゲルス文学・芸術論』大月書店、四七頁。

(11) K. Marx, *Ökonomisch-philosophische Manuskripte. Das Verhältnis des Privateigentums*, S. 162-3. 選集補巻四、三二二頁。

(12) K. Marx, *Das Kapital*, Bd. I, S. 178. 長谷部訳青木文庫版、第二分冊三一九頁。

- (13) K. Marx, Ökonomisch-philosophische Manuskripte, S. 161. 邦訳「三二〇頁」。
- (14) K. Marx, Zur Kritik der politischen Ökonomie, S. 134. 邦訳「一〇頁」。
- (15) マルクス『経済学批判要綱』第二部「富の資材的代用物としての貨幣」
- (16) G. Lukács, Geschichte und Klassenbewusstsein. Die Verdinglichung und das Bewusstsein des Proletariats, S. 95. もとより「商品流通およびそれに照応する主体的ならびに客体的な商品諸関係は、あきらかに社会のこの初期の発展段階にすでに存在していた」。だが、前資本主義社会では、商品関係は主体的にも、客体的にも単に部分的にみられたにすぎず、「社会構成を決定づける形態」とはなっていないのであって、資本主義社会ではじめて、商品関係が社会の現象全体を支配したといえる。ということは、空間的に商品形態が拡大し、共同体相互の交換から、さらにすすんで共同体内部へ浸透するだけでは不十分であって、商品形態が社会の基本的な構造である生産過程をとらえる、つまり、労働力の商品化が社会全体の運命となつて、商品サテリが普遍的となるのである。
- (17) K. Marx und F. Engels, Die heilige Familie, oder Kritik der kritischen Kritik. Bücherei des Marxismus und Leninismus, S. 137. 選集補巻五「二四四頁」。もとより、この疎外の形態は労資では全く異なる。
- (18) K. Marx, Die deutsche Ideologie, S. 57. 選集第一巻八〇頁。この分業による人間労働の疎外について、マルクスはつぎのように立ちいつて論じている。「社会的な力、すなわち分業によって生じた多数の個人の協力からうまれる倍加された生産力は、この協力そのものが自発的でなくて自然発生的であるために、各個人にとつてかれら自身の結合された力としてではなくて、疎遠な、かれらの外部にある強大な力として感じられる。かれらは、この力がどこから来てどこへ去るかを知らないから、もはやこれを支配することができない。反対に、いまやこの力は、独自の、人間の意欲および行動とは無関係な、いかなる人間の意欲と行動とを支配する一列の様相と発展段階をたどつてゆく」。Marx, *ibid.* S. 34. 邦訳「三四頁」。
- (19) K. Marx, *ibid.* S. 57. 邦訳「八〇—一頁」。
- (20) G. Lukács, Einführung in die ästhetische Schriften von Marx und Engels, Sinn und Form, 1953. 「マルクス・エンゲルス文学・芸術論」大月書店、五六七頁。
- (21) G. Lukács, Geschichte und Klassenbewusstsein, S. 99.

- (22) G. Lukács, *ibid.* S. 99—100.
- (23) G. Lukács, *ibid.* S. 100. この商品人間の分裂性は政治過程においてはことに、官僚的人間にあらわれる。
- (24) K. Marx, *Das Kapital*, Bd. I, S. 398. 邦訳、青木文庫版六二三頁。
- (25) G. Lukács, *ibid.* S. 101.

四、批判的展望

われわれはこれまでルカーチの社会存在の論理を、社会における人間の生産実践の構造にまで下って追求し、社会的労働の主体・客体の同一性と分裂性の過程を中心に展開した。⁽¹⁾まず、第二節でヘーゲルの歴史哲学のなかにルカーチ論理の原形を求めた。それによると、こうである。人間は労働によって物を生みだすが、この過程をつうじて主体と客体とは相互に対立するとともに、それぞれ他にたいして自立化する。ここに直接的に統一していた社会は自己分裂して生成するのである。人間は労働によって社会を作るとともに、この社会が客観的に独立して個人に対立する過程は、ブルジョワ社会においてもつとも激化するのであるが、このように分裂しながら、分裂して孤立化した個人は特殊な欲求のために相互に一定の社会関係にみちびかれることになるのである。このことは、社会は主体と客体とに分裂する過程で、実は労働によって同一性を実現している。つまり分裂性を媒介としながら社会は自己否定的に自己を形成することを意味しているのである。そしてこのことは、社会の成員に意識されないままにおこなわれ、しかも、このためにこそブルジョワ社会は、より高次の段階での社会の自己実現であり、したがって進歩的であると考えられねばならない。われわれはマルクスの論理のなかに、はっきりとこの点をよみとるこ

とができるのである。⁽²⁾だが、問題なのは、ブルジョワ社会において社会形成の仕方が歪められてあらわれるということ、いかえれば、社会存在の構造の顛倒性という局面なのである。この点を解明するためには、分裂性の構造をさらに深く追求しなければならない。第三節でわれわれが取りあげた課題が、これである。

そこでは、まず、自然を土台とし感性的存在としての人間と感性的対象との関係を設定し、現実的社会をこのような対立を媒介として生成することを問題とした。というのは、ヘーゲル自身すでにブルジョワ社会の消極的要素を洞察し、その分裂性を展開してはいるのだが、⁽³⁾しかし、この矛盾をどこまでも現実社会の矛盾に求めるのではなく、意識の地盤においてとらえ、このようにして矛盾を絶対精神のなかに解消してしまうからである。われわれはどこまでも解消されない対立を、現実の社会構造のなかで追求しなければならない。このことを確定したうえで、先のブルジョワ社会の解消されない分裂性をば、ルカーチのマルクス理解をとおしてとらえてきた。すでにみたように、ここでもっとも重大なことは、ルカーチがブルジョワ社会の矛盾を商品構造のうちに求めたという点である。この商品生産社会の構造のなかでこそ、先にヘーゲル哲学で設定した「労働の外在化」の論理がより深化されてあらわれるであろう。というのは、人間労働の客体化である社会は商品の世界という形態変化をとげて、いよいよ豊かに主体から分裂し対立している、のみならず、商品形態は主体内部に食いこみ、「質的人間」と「量的人間」に分解してくるからである。全人格と部分的人間との対立、個性と抽象的人間との対立も、実はこの商品構造からあらわれるものなのである。しかも、特徴的なことには、商品構造を分業一般という形態でのみとらえ、分業の発展する過程に照応して、非人間化作用の深化する姿を描いていることである。⁽⁴⁾

このようなルカーチ論理の展開には、つぎのような思想史の系列がおかれ、これが展開の支柱となっている。す

で第二節のはじめにあきらかにしたように、ルカーチ論理の支柱はヘーゲルとマルクスとの継承線である。だが、問題はこの継承の仕方であって、労働の外在化という論理、いわば人間労働の主体と客体との同一性の論理が深められてゆく過程として、ヘーゲルとマルクスとが媒介されている。もとより、観念論と唯物論との対立がとりあげられており、単に無媒介的な連続とはいえないにしても、このような差別は先の外在化の論理の徹底される過程を媒介しているであり、他の要因の区別もこのなかにすべてかかわらせられている、といえよう。

では一体、われわれはこのようなルカーチの論理から積極的になにをうけとめ、そしてどの点を問題とすべきであらうか。この点については、いままでの叙述が、すでにしめしているはずである。あえて、より具体的に立ちいつてのべれば、つぎのようになるだろう。すなわち、ルカーチはマルクスを軸としてヘーゲルの労働の外在化の論理を深めようとしたのだが、このばあい、マルクスの論理の中心を商品構造による主体と客体の分裂に求めたこと、しかもこれを分業による人間の自己疎外にみているという点が、きわめて特色的であり、この点が、われわれのさしあたっての問題となる。いうまでもなく、近代ブルジョワ社会を分析するばあい、商品構造の普遍化する世界として解くことは、それ自身において正しく、また、商品世界と分業とは不可分離なものであり、分業の展開としてブルジョワ社会の構造をえがくことにも問題はないうであらう。だが、商品構造を中心に社会存在の構造をとらえるとき、そのなかでの私有財産の原理という側面をみなければ、正しい展開はなされえない。もちろん、ルカーチはまったくこの観点を見のがしていたというのではない。小論のなかで詳しく展開しえなかったのではあるが、いま問題となっている機械体系についても資本主義的機械工業について考えており、後期の諸研究をもつまでもなく、『階級意識論』はなによりも階級関係の視点をもつものであった。この点ではルカーチを超階級的な商品構造論と

同列におくことはできない。だが、そうだからといって、ルカーチが私有財産の視点からするブルジョワ社会の社会關係の歪みを正しく展開しえたといえない。この点は、マルクスがすでに『ドイチュ・イデオロギー』で分業の發展のなかではつきり私有財産の問題を提起しているのと対比すれば、きわめてはつきりする。すなわち、労働による主体と客体との対立は、単に人間と物との対立ではなくて、階級社会では労働と私有財産との対立であり、ことに資本主義社会ではより嚴密な規定をうけて賃労働と資本との基本的な対立としてつかまねばならない。ルカーチは、人間が作りだす対象が、人間の手から客觀的にはなれて自己運動する世界であり、この客觀的世界が商品として、あるいは分業・機械体系としてあらわれることを指摘するが、この商品が私有財産として個人の手に蓄積される過程として展開されてこない。だから、主体内部の分裂性は商品一般の世界のなかでみられるように、「量的人間」と「質的人間」の対立、あるいは全人格と部分的人間との対立としてのみ、描かれることになるのである。われわれは、マルクスとともに分業を私有財産の關係にまで具体化させて、ブルジョワ社会を私有財産の極点としてとらえ、したがって、主体内部の分裂性はむしろ基本的には「階級的個人」と「人格的個人」との分裂性にある、とみななければならぬ。マルクスはこのことをつぎのようにのべている。「個々人はつねに自己から出発した。しかし、歴史が發展するにつれ、とくに分業に必然的にもなう社会的諸關係の獨立化によって、各個人の人格的であるかぎりの生活と、かれがなんらかの労働部門とそれに属する諸条件とに従属しているかぎりの生活とのあいだに、一つの區別が生じてくる。……階級的個人と人格的個人との區別、生活諸条件の個人にとつての偶然性は、それ自身ブルジョワジの産物であるところの階級の出現とともに、はじめてあらわれる」と。われわれブルジョワ社会の現実の人間は、人格的個人としては全く平等な關係を相互にとりながら、階級的人間として「生産過程に

おいて占める地位の類型」によって必然的に生産關係にくみこまれ、資本と賃労働に分解する。われわれは、このような主体の分裂性を規定しておいて、同時に先の人間構造つまり「量的人間」と「質的人間」の分裂性を導入しなければならぬ⁽⁶⁾。現実におけるブルジョワ社会の人間は、このように商品のロゴスと資本のロゴスによって規定され、それぞれによる二重の分裂性をうけているのである。ルカーチの問題のとりあげ方が上のようであるとすれば、この社会存在の論理はきわめてヘーゲル哲学に接近している、いしかえれば、かれがマルクスの論理として展開しているものも、そこではヘーゲル化されたマルクスが語られている、といえるであらう。この意味で、さきにわれわれはルカーチをばマルクスによるヘーゲルの批判的継承としたのだが、実は、ヘーゲル論理によるマルクスの包摂といった側面を同時に示さねばならない。あえて粗大な言葉をもちいれば、ルカーチ論理はマルクスを媒介としたドイツ古典哲学、ことにその合理主義的要素の再現である、とてもいえよう。われわれが、ルカーチ論理を展開しはじめるにあたつて、なによりもまずヘーゲルの歴史哲学にその原形を求めたのは、このためである。

だが、このようなものであるからといって、ルカーチの論理に積極的な要素がみとめられないというわけではない。むしろ、これとは反対に、まさにこのようなものとしてこそ、われわれは受けとめるべきおおくのものをこのなかにみとめることができるのである。すでにくりかえして主張してきたように、社会の根底に人間の生産実践の矛盾的構造をすえ、その同一性と分裂性とのカテゴリーによって社会存在の論理を展開したことは、社会存在の本質にふれたものといわねばならない。ことに、この労働の外在化の頂点を近代ブルジョワ社会の形成原理とし、この社会においてこの論理が深められてゆく過程をどこまでも展開していった点に、もつともよくルカーチ論理の鋭さがみられよう。近代社会はなによりもまず個人の自己形成を前提とする。自立化した特殊的個人が労働において

物を媒介として相互に結合することによって、社会は生成するのである。だが、この人間相互の結びつきである社会関係は、歪められている。この歪みはたしかに、社会を形成せしめる分業に求められるのであり、この分業さらに商品生産の矛盾は、ブルジョワ社会内部に求めることができよう。もとより、この分業とはブルジョワ社会においては、財産の私的所有と不可離のものである。ルカーチはむしろ分業一般からくる歪みを展開したのだけれども、このためにこそ個人と社会との分裂性、さらには全人格からの抽象的人間の分裂をより深くつくことができたのである。だが、われわれはいまや、私有財産関係から生ずる「人格的個人」と「階級的個人」の分裂性のうえに、この「具体的人間」と「抽象的人間」の分裂性をとらえ、多様な分裂性の諸側面の相互関係によって近代ブルジョワ社会の存在構造をより具体的にとかなければならないのである。

(1) 小論は第三節で、資本主義の商品形態における分裂性のカテゴリーを経済過程について確定し、さらにこれが政治過程とイデオロギーにまで滲透する過程を展開する豫定であったが、紙数にかぎりがあるので、ここでは経済過程の問題にとどめた。この残された問題は『ルカーチのイデオロギー論』として改めて論じたいとおもう。

(2) K. Marx, *Das Kapital*, Bd. I, S. 383. 長谷部訳、第三分冊、六〇三頁。マニエフアクチュア分業についてはあるが、資本主義社会における社会全体の生産力の発展について、マルクスはつぎのようにのべている。「マニエフアクチュアの分業は、手工業的活動の分解、諸労働用具の特異化、部分労働者たちの形成、一全体機構内でのかれらの群化および結合によって、社会的生産諸過程の質的編制および量的比例性、つまり一定の社会的労働の組織を創造し、それと同時に労働の新たな社会的な生産力を発展させる」。もっとも、そのことがおこなわれるのは、一方で「個別的労働者を不具化する」ことによってではあるけれども。

(3) G. Hegel, *Grundlinien der Philosophie des Rechts*, §. 198. 連水・岡田訳、二六四頁。分業体系が機械化をもたらし、これが生産力を増大させるが、同時に人間が排除される過程を、ヘーゲルははっきり洞察した。すなわち「生産的行為が抽象的になれば労働はますます機械化して、ついに人間を労働から除外して、機械をして人間に代らしめることを可能にする」と。

(4) G. Lukács, Der junge Hegel, S. 683-6. (出口編『経済学と弁証法』二四—二頁。ルカーチが「疎外」の特殊資本主義的な形態を「物神性」Feischismusとしてとらえていることは、このことをきわめてよく物語っている。物神性は單純商品生産にも妥当する性格であることはいままでもないであらう。どちらかといえば、ルカーチの外在化の論理は、かれの批判したヘーゲルの対象化の論理であって、この論理のうちに、マルクスの疎外の論理を包摂した、といえよう。

(5) K. Marx, Die deutsche Ideologie, S. 76. 選集、第一卷、九二頁。すべての個人が階級的人間に分解されつくすと、個人は階級的個人として、たがいに結合している。労働者と資本家との関係もまた必然的に結合せざるをえない。ことに、労働者についていえば、「労働者は本源的には、商品を生産するための物質的手段をもたないために、自分の労働力を資本に売るのであるが、いまやかれの個別的労働力そのものは、それが資本に売れないかぎり用をなさぬのである。それはもはや、……資本家の作業場においてのみ機能する」Das Kapital, Bd. I, S. 378 長谷部訳、第三分冊、五九七—八頁。

(6) K. Marx, Das Kapital, Bd. I, S. 328. 邦訳、第三分冊、五九七頁。マルクスも分業が個人を細分化することをくりかえしのべている。「特殊的部分労働が種々の個人のあいだに配分されるだけでなく、個人そのものが分割され、部分労働の自動的機構に転化されるのであって、人間をそれ自身の身体の単なる断片だというメネウス・アグリッパのばかげった寓話が現実化される」。しかも、この側面はマルクス自身きわめて深く洞察していたところであって、このことはマルクスが個性の自由についてのべているところをみればあきらかとなる。

この全人格の分割をルカーチがより強調するのは、一つにはルカーチが社会科学よりも芸術・文学の領域に大きい関心をもっているためであらう。

(7) 分業のカテゴリーはきわめて近代的なカテゴリーである。それは近代社会を形成する原理であるが、同時に近代社会自身の分裂性をしめす。というのは、社会主義社会で私有財産が廃棄されたあとで、分業からくる分裂性はこのからである。毛沢東が『矛盾論』に基づいて、社会主義社会における非敵対的矛盾について論じているがわれわれは、この矛盾をば近代社会一般について生ずる分裂性として理論づけることができる。このばあいルカーチのいう広義の「労働の外在化」のカテゴリーが、大きい意味をもつ。われわれは、この古典的概念を新しい局面で批判的に生かさねばならないであらう。